

【現代語訳】

式部の省の次官の大江匡衡朝臣の息子である、式部省の定員外の次官挙周が、重病になって、病氣回復の見込みが少なく思われたので、母である赤添衛門が、住吉神社に参詣して、七日間お籠りをして、「このたび（挙周の）命が危ないのならば、すぐに（挙周の命を）私の命とお取替えください」と申し上げて、七日目の満願の日、神に献上するのに用いる御幣のしで（＝垂らした紙のようなもの）に書きつけました歌が、

（挙周の命と）変わろうと祈る命は惜しくないが、どちらにしても別れるようなことが悲しい：

このように詠んで献上したところ、神が真心に深く感動したのだろうか、挙周の病氣はよくなった。母が参詣から帰ってきて、喜びながらこのことを話すと、挙周がたいそう嘆いて、「私が生きているとしても、母を失っては何の生きがいがあるだろうか。一方では親不孝の身であるだろう」と思って、住吉神社に参詣して申し上げたことには、「母が私の代わりに命が終わらなければいけないのであれば、すぐにもどのように私の命を召し上げて、母をお助けくださいませ」と泣く泣く祈ったところ、神がしみじみと感じてお助けがあつたのだろうか、母子二人ともに無事に過ごすことができましたとき。